



寄宿先の塾で教え込まれた「世のため」に生きる姿勢

「人は人の中でこそ人として育つ」というのが加藤憲一さん(40歳)の持論だが、加藤さん自身が子供のころにつかんだ確信かもしれない。

1964年小田原生まれ。父親は旧大蔵省に勤める役人だったが、若くして亡くなった。上に姉が2人。母親が保母の資格を取って家計を支えたが、加藤さんが中2のとき亡くなった。幼くして肉親との縁は薄かったといえよう。

姉たち2人とは9つと8つ離れていた。働ける年齢であり、加藤さんは姉に育てられたが、小5のときから和田重正という人が主宰する塾に通っていた。青少年に生きる力を与え、世の中のため仕事をできる人を育てようという趣旨の塾だった。

「寄宿塾です。ほくは家がそばだったから泊まりませんでしたが、たいいてい夕飯は塾でいただいた。丹沢に寮があり、週末になるとみんな出掛けて野山を駆け回る。宇宙という大きな営みに添って生きるという教えですが、特定の宗教じゃない。高卒まで塾の世話になりましたから、ほくににとっては育ての親も同然です。」

塾は今、和田さんの長男の和田重宏さんに引き継がれています。和田さんはNPO法人「子どもと生活文化協会」も主宰している。

加藤さんは県立小田原高校に進んだ。山岳部に入り、高2のとき生

徒会に立候補し、高3の前半まで生徒会長をつとめた。山岳部はインターハイに出場したが、その壮行会をさぼって身障者登山会に参加していたというから、塾の教え「世のため」は性根に染み込んでいる。

1浪して84年、京都大学法学部に入った。だが勉学より反戦・非核の運動や丹波での援農、障害者のためのボランティア活動に熱を入れた。

「寄り道とバイトはたくさんします。先斗町でパーテンもしたり、引越しや家庭教師、造園なんかのバイトもしています。」

司法試験や国家公務員試験には魅力を感じず、88年大学を卒業して経営戦略コンサルタント会社のコーポレートディレクション(東京・平河町)に入社した。

「社員80人ぐらいの会社です。5年足らずで辞めたけど、ここでは大規模再開発や鉄鋼会社の多角化、損保の営業、不動産仲介などについて調査し、レポートにまとめる仕事をチームで手掛けた。お金をもらって勉強させてもらった感じです。仕事をやっているうち、無性に収益の論理じゃない世界に行きたくなった。小6のときNHKの大河ドラマ

『花神』を見ていた。時代の変わり目に生きた松陰や晋作といった記憶があり、地球の作り直しに関心をもち始めたんです」

「花神」を見ていた。時代の変わり目に生きた松陰や晋作といった記憶があり、地球の作り直しに関心をもち始めたんです」

白 血病の長女のため 農業、漁業を始める

92年、27歳で会社を辞めた。その

前年、京大時代に知り合った女性と結婚、所帯を持っているから、勇氣ある退職である。それまでも小田原に住み、新幹線通勤していたのだが、すっかり小田原の人に帰って、前記の塾のネットワーク部分を手掛ける事務局長になった。転職により年収700万円が1挙に月給25万円にダウン、長女も生まれた。

「やったのは「子どもと生活文化協会」の立ち上げです。塾の子供たちを連れ、4泊5日で丹沢の寮に出掛ける。電気も水道もあるけど、水道は水が止まったりする。薪で炊事し、風呂を沸かす。竹や木を間伐し、道普請する。一流の陶芸家や数学者を講師に招いて一緒に生活してもらおう。同じ釜の飯を食うことで分かち合える何かを子供たちにつかんでもらおうという狙いです」

だが、長女は2歳で白血病を発病した。半年入院させて2日に1回の面会日に通い続けた。一応寛解して退院したが、化学療法では治しきれない。加藤さんはそれまで以上に暮らしと食べ物を見直さなければならなかった。

「事務局の仕事は4年間やった。面白かったけど、長女の病気に対処しなければならぬ。幸い後輩の女性が事務局をやってくれることになり、96年、ほくは辞めて、かわりに農業と漁業を始めました」

毎日の食べ物自分をつくる。田を3反、畑を4反借り、農機具は叔

転機——その先で見たものは 142

娘の重病にも負けず 「わが街」活性化に邁進する男

溝口 敦



父に借りて有機農法で米や野菜をつくった。初期投資は少なかったが、田と畑だけでは暮らせない。地場産業の苗木づくりを手伝って稼ぎの足しにした。コナラ、カシ、クスノキ、ケヤキ、サルスベリ、ハナミズキなど苗木の栽培である。

朝4時から8時までは魚市場に入り、水産会社で魚介類の運搬をした。その上1年間は海に出て定置網の手伝いをした。アジ、カマス、イワシ、イサキ、カンパチ、ヒラマサといった魚を捕り、仕事を終えればバケツ一杯魚をもらって家に持ち帰り、その日のおかずにした。

自然相手の仕事だから気は休まるし、ストレスは感じない。が、4つの仕事をひとりでこなすのは辛い。身体がよほど丈夫でなければもつまい。加藤さんは身長182cm、体重75kg、きわめて健康だが、こうまで体を酷使しても月収は20万円を切った。その上、上の子に4年遅れて男の子が生まれた。破水して900gという超未熟児だった。3ヵ月保育器に入ったが、大きな障害もなく育ってくれた。だが、ふつう以上に子供たちには手も費用もかかる。私生活だけに埋没して当然だが、加藤さんの「世のため」意識とお世話活動は消えなかった。

子どもと生活文化協会の事務局長だった95年、阪神・淡路大震災が起きた。震災をきっかけに神奈川県民交流集会に参画、その西湘地区実行委員長を引き受け、02

年7月まで7年間続いている。農業に転じた時期にも地産地消の推進と地域の農を守ることを目的とした「あしがら農の会」の立ち上げに参加している。

「自家消費のために無農薬、有機の米と野菜を始めましたが、食べきれないほど穫れる。で、40軒のお宅と契約し、買ってもらっていた。農業もようやく軌道に乗るかというころ、娘の病気が再発した。いつときは意識を失うほど状態は悪く、化学療法も十分にできない状況で、医者もサジを投げたんです。

娘を手元に置いて、こうなったら玄米中心の民間療法で行こうと夫婦で腹を決めました。その後快方に向かい、今は元気で中1になりました。しかし、脳に損傷を受けて特殊学級に入ってます」

人の親としては辛すぎる話である。

街の復活をかけた市長選に立候補
99年、加藤さんは小田原駅に近い繁華街のテナントビルのオーナーと出会い、ビルの事務局長として街の活性化に取り組み始めた。手始めにビルの空き店舗を活用してSOHO対応のメンバーズオフィスなどを開設した。

「小田原には海も山も地場産業もある。歴史も文化もある地域です。刃物、竹細工、小田原漆器、寄木、鋳物、染め物、桶、石材、魚肉加工練り物など、伝統産業がいくつもある。全国でもこれほど魅力的

な地域はないでしょう。だけど街は衰退している。繁華街には空き店舗が増えていく。

今までは立地に甘んじて経営努力をこなさなかった。衰退すべくして衰退したのかもしれないけど、なんとか活性化したいといけない。01年小田原市政策総合研究所が市民研究員を募ったとき、手を挙げた。地場産業の再生となりわいをキーワードに駅前「なりわい市場」などを開いたんです」

たしかに小田原を訪ねても、街に活気は感じられない。駅前からして人通りは少なく、夜は暗い。時代に取り残されたようなくすみか漂う。加藤さんは02年小田原インキベーションフォーラムを設立、その事務局長になって起業予備軍の掘り起こし活動を始めた。03年には国土交通省関連の審議会の委員

になり、富士山を取り巻く広域圏の連携と活性化に取り組み始めた。だが、この程度のことでは街の復活はない。直接、市政を動かせば即効性ある施策も実施できる。04年5月、ついに加藤さんは小田原市長選に立った。結果は現職が3万6000票で再選され、加藤さんは敗れたが、それでも3万1000票の惜敗だった。現職には共産党を除くすべての政党が支持に回ったのだから、大善戦といつていい。

「ぼくの方は組織を組まず、市民ボランティアの運動でした。小田原は保守の強いところで、国会議員、

県議、首長、市議らの関係が強く、その中でポストを申し送りする。何も変わらないし、変えられない。市民には諦めのムードが濃くなっています。

誰かが動けば何かが変わるはずですから、次回も立つ覚悟はあります。だけど市長になることが目的じゃない。今の小田原は市長に受かつてから変えるといった状況じゃなく、もっとせつぱ詰まってるんです」

ここで筆者の個人的な好悪をいわせてもらえば、政治家志望の人は苦手である。どこかに違和感を感じる。だが政治でなければ変えられない現実があるし、従来型でない若手政治家が地方自治体で有能さを発揮している例もある。市長選に出たからといって、加藤さんを敬遠する理由はないわけだ。

加藤さんのこれまでを見るなら、経済的安定を第1の価値と置かない半生とはいえる。自ら好んで山も谷もつくって、自ら登攀し、くぐり抜けてきた。子供の発病という誰が悪いのでもない谷さへ敢然と渡っている。

「子供の病気がなかったら気づかなかったことがあると思う。人間にとつて何が大事なのか、突きつけられた気がします」

と加藤さんはいう。

貧乏は人を不徳に走らせない最大の根拠になるとか。同様に不幸は人の足を地面につけさせ、事の軽重を見定める目を養うかもしれない。

